

シヨーパーンハウエル「恋愛の形而上学」の研究（下ノ上）（註二）

石 塚 勝 雄

十七 （註二）

本節は、私たちが異性を観察し・選択する態度の真剣さ・真面目さなどに対する、いかにもシヨーパーンハウエルらしい形而上学的思惟の叙述であり、その前段は次の如くである。

『私たちが女の身体の各部を検査しながら観察する時や、女が私たちに對して同じことをする時の真面目さ・私たちが氣に入りにかけた女を探究する時の批判的な慎重さ・私たちの選択の我儘なこと・婚約の男が婚約の女を觀察する鋭敏な注意・どの点でも欺むかれまいとする用心深さ・相手の重要な部分の過不足を重大視すること、——これらは皆、目的の重大さに全く相應しているのである。というのは、新しく生れるものは一生涯の間、同じような部分を持たねばならないからである。（中略）これらのことが勿論意識されているのではない。むしろ誰でも、このむずかしい選択は自分自身のヴォルスト淫樂のためにするのだと思っている。しかし實際は、自分自身の體質を前提として、種族の利益に丁度よく適應するように選択しているのである。種族の典型を出来るだけ純粹に保つことが、各人のかく隠れた職務である。この場合個人は自ら知らないで、自分よりも高いもの、すなわち種族の御用を勤めるのである。』

以上本節前段の敘述は比較的現象的であるが、つぎに述べる後段は、背後にあってそれを支配・操縦する主体としての「種族の守護神」(der Genius der Gattung)・「恋愛の神」(Kupido, 英 Cupid)と云う形而上的実体の立場からの敘述である。この主体に対してシローペンハウエルはここでもこのような二つの名称を使い分けているが、これは彼の芸術的論文の拘であって、論理的には同一の形而上の実体を指すことは已に述べた。(註三)

『初めた相見た二人の若い男女が、互に相觀察する場合の深い無意識な真面目さ・彼等が互に投げる探究的で貫ぬくような眼差し・二人の身体のあらゆる部分と容貌とが受けなければならない綿密な検閲など、——これらのもののうちには、全く特別なことがあるのである。すなわち、この探究と検閲は、彼等二人によって生み出さるべき個体の性質の配合についての種族の守護神の冥想^{メデタツシ}なのである。この冥想の結果、相互の氣に入りの程度と相互の欲求の程度が決定する。(中略)このように種族の守護神は、生殖能力を有するすべてのものの中において、未来の種族について冥想している。クピードが絶えず活動的に思索し熟慮しながら従事している大事業は、未来の種族の構成に外ならない。種族そのものと未来のすべての世代に関するクピードの大事業の重要性に比べれば、その全体が一時的の果敢ない性質しか持っていない個人に関する事柄の重要性などは、全く問題にならない。それ故にクピードは何時でも遠慮なく個人を犠牲にする心構えでいるのである。というのは、クピードが個人に対する関係は不死のものが死滅するものに對する如く、クピードの利害が個人の利害に對する関係は無限對有限の関係である。

そこでクピードは、個人の幸不幸に関する事よりもはるかに高遠な事業を自分が処理しているのを意識して、戦争の騒ぎの中にも、実務生活の混雑の中にも、疫病蔓延の間にも、超然として無頓着に自分の仕事を遂行する。そして自分の仕事を携えて、僧院の隱遁生活の中にさえ入り込むのである。』

右の敘述の中に、人間個人個人が人格的な形而上の実体にあやつられて、生き・恋する姿がよく描かれているように思う。言わば、人間個人個人は春に芽生えて秋に枯死する木の葉の一枚一枚のようなもので、樹木の生命力(種族

の守神)にあやつられ、樹木に奉仕して果敢なく消え去るのである。右の敘述の最後のところでは、人間社会における恋愛の滲透の遍在性の根柢が、種族の霊の立場から彼特有の諷刺的筆致で描写されている。

選択された異性に対してでなければ恋愛感情は湧かないものであるから、選択問題は恋愛論において重要な基底的地位を占めており、したがって、この問題はまず第九節で序論的に論じられ、さらに第十二節から本節にわたって再論され詳論されたわけである。ところがその前後を通じて気が付くことは、互に異性を選択するという表現は少なく、男が女を選択するという表現(逆に女が男を選択する場合も含めて論じているらしいのに)が多いことである。

このことは後述の箇所でも同様であり、否彼の恋愛論全般について言えることである。これには二つの原因が考えられ、一つはシヨールペンハウエル自身男であって、男の心がよく解るので、つい男性中心的表現の方に筆が走ったことである。他は、当時の西欧社会が今でも大体そうであるように男性支配(Androcracy)したがって男性選択(Male sexual selection)の社会であり、選択権が男性の手に握られていた事実の反映であろうということである。しかし、異性に対する選択本能は本来女性の分野なのではあるが、社会が男性支配的に歪められていたために、それが圧殺されて現象形態をとらないだけのことであるとする見方がある。ウォードなどもこれを強く主張し、自然の声(the voice of nature)は女性に対して、弁別せよ(discriminate)・最善を選べ(choose the best)と命じているという。(註四) 選択本能が男女両性に与えられていることは事実として承認されなければならないが、女性の方が強いという主張は、一般に言われている「男性は本来一夫多妻的である」(註五)にも一致し、注目すべき見解と言えよう。この男の「一夫多妻性」はシヨールペンハウエルも主張している(註六)にもかかわらず、それが選択本能における男女差となつて現われることの考察を欠き、以上筆者が述べたような当然の原因があつたにしても、漫然と「男が女を選択する」という表現を数多く用いたということは、描写・論議の精緻さを欠くものといわなければならないまい。

(註一) 本論集前号、拙稿につづく。

(註一) Eduard Grisebach, Schopenhauers Sämmtliche Werke, (Reclam) Bd. II, S. 1345 ff.

(註三) 本論集前号、拙稿三六頁。

(註四) L. F. Ward, Pure Sociology, 1921, p. 325.

(註五) 兼好法師も「妻というものを男のもつまじき物なれ」と述べているが、これは、一夫一婦制は女の側から見れば望ましいものであるにしても、男の一夫多妻的本性から見れば齟齬な發展性のないものとして、これを嘲ったものといえよう。

(註六) 本論集前号、拙稿二七—二八頁。

十八 (註一)

前節までは、異性を考察・選択する場合の絶対的考察条件と相対的考察条件を論じて来たのであったが、本節はどのような考察条件だけでは説明し尽されない、言わば種族の神の特別の命令で現われる、崇高な宇宙大の恋愛とその消滅を論ずる。相対的考察条件が相互に適応した場合に最も激情的な恋愛が発生することは、すでに見た通りであり、換言すればそれは恋愛が個体化されたということであり、それが絶対的に唯一人の相手に向けられた場合に本節で論ずるような恋愛が発生する、と彼は言う。

『両性の^{フエリ}恋着^{アクトハイト}の程度は、恋着そのものの個体化するにつれて愈々増進することを私達は知ったのである。この場合でさえ著しい激情が起るのであるが、この激情が唯一人の相手にのみ向けられることによって、すなわち言わば種族の特別の命令で現われという事によって、直ちに一層高貴な・崇高な^{アンストリフ}色調を帯びて来る。これと反対な理由から、単なる性欲は野卑であると断じてよい。というのは、それは何等の個体化もなく、漫然とすべての人に向って、殆んど質^{クオリテ}ということを顧みないで、ただ量の方でのみ種族を維持して行こうと努めるからである。しか

し恋愛の個体化とそれに伴う恋着の強度が高い段階に達すると、その恋情を満足するのだから、世界の一切の財宝も、否生命そのものも、その価値を喪失するようなことになる。』(註二)

つぎに、失恋によって狂人になったり自殺したりするような恋愛は右のような恋愛なのだが、この場合は前述の諸々の考察条件の外に別の何物かがあるに相違ないと、彼は言う。それは人間の眼には見えないから、假定を設けるより他はないとして、つぎのように述べる。

『この場合には、体質ばかりでなく男の意志と女の知力とが相互に特によく適合していて、その結果、この二人からのみ、種族の守神が生み出そうと志している一つの全く特定の個体が生まれ得るのだと、私達は假定するより外はない。何故に種族の守神がそれを志すかは物自体の本質の中にあるので、私達は突きとめることが出来ない。』
もつと根源的に言うならば、「生きんとする意志」はこの場合、この父とこの母とからのみ生まるべき精密に特定の個体において、自己を客観化しようと切望しているのである。』

大哲カントの説いた有名な「物自体」は、右の敘述にも見られるように、シェーペンハウエルもこれを肯定して出発したのであり、その「物自体」が彼の哲学においては「生きんとする意志」なのである。そこで恋愛を種族の霊から説明した場合、それを更に根源的に説明すれば、「生きんとする意志」から説明することとなるのである。

以上に直ぐつづけて、言わば宇宙大の恋愛——それと引き替えに世界の一切の財宝、否自分の生命をも捨てようとする——の発生がつぎのように説明される。

『意志それ自身の有するこの形而上的欲求は、さしづめ、万有の中において、未来の両親たる人々の心の中より外には、他のどんな活動舞台をも持たないのである。そこで未来の両親の心はこの熱望によって捉えられるが、この時にもなお、単に純然たる形而上的——すなわち現実^{ゲア・ネン}に現われている事物以外に存在する——目的を持つものを、あたかも自分自身のために求めているかのように妄想するのである。それ故、ここで初めて生れ出る可能性を

得た未来の個体が生存圏内へ踏み込もうとする熱望は万有の根源から湧き出るわけなのであるが、この熱望こそは、現象界には、未来の両親相互間の高貴な・自分以外の一切のものを蔑視する激情となつて現われるのである。

① 実際これは比類のない迷妄^{ヴァグ}であつて、そのように惚れ込んだ男は、その女と同食^{バイシュラフ}するがためには世界の一切の財宝を捨ててもよいと思うようになる、——だが実際は、その女との同食も別のどんな女との同食より以上のものを彼に与えてくれるわけではないのに。』

つぎは、このように高貴な激情^{ライデンシャフト}の消滅関係である。第一は、平凡な恋愛の場合と同じように、それを享樂すると共に消滅することである。これは彼の上述の真理を証明するものだと言ふ。つまり、形而上的目的を達成したからには、その手段として未来の両親の心に臨ませた激情は、一応無用に歸して消失するわけである。^(註三)この時、男女共驚ろき怪訝^{けげん}に思うと言ふ。つまり、だまされたと実感するわけである。^(註四)

激情の消滅の第二は女の不孕の場合である。これは本来の形而上的目的が達成されないからである、と彼は説明する。ここで、彼の筆は恋愛論からはいささか離れて、彼の哲学特有の逍遙的な道草食いに入る。すなわち、この女の不孕は、同じ形而上的生命力が生存へ現われようと努力している動植物の萌芽が、日々幾百万となく踏み躪^{にじ}られて滅びて行くのと同じ運命だと、彼は言う。この場合目的の達成が不能に終つた「種族の意志」にとって、何か「慰さめ^{トロース}」となるものがあるのであろうか。「種族の意志」の前には、無限の空間・無限の時間・無限の物質、従つて再来への無尽蔵の機会が開けていることが、唯一の「慰さめ」なのだ、彼は言う。この辺に、徹頭徹尾形而上学者であつた彼の面目がよく現われていると思う。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1346 ff.

(註二) この敘述の中にある恋愛と性欲との相違点についてのショーペンハウエルの説明を、ドイツの性科学者ヒルシュフェル[†] (Hirschfeld, 1868—1935) は次のように簡潔に表現している、「性的衝動は一夫多妻的で、恋愛は一夫一婦的だ。」

(厨川白村『近代の恋愛観』改造社、大正十一年、一九二頁。)

(註三) 目的の達成により手段が消滅する現象は、より包括的には節約の法則 (Sparsamkeit, law of parsimony) の範疇に入るのであつて、シヨーパーンハウエルは女性の青春美の消失をもこの法則で説明している。(拙稿「シヨーパーンハウエルの女性論」本論集第二号、三七頁。)

(註四) この恋愛の欺瞞性については彼がすでに度々論及しているばかりでなく、後述の箇所でも再三論じているのは、これが彼の説く恋愛の本質からの当然の帰結だからであるが、その度毎に欺瞞の様相やその表現が相当違つているので、後述の箇所でも再論するであらう。

十九 (註一)

本節では、シヨーパーンハウエルは他の学者の所説を掲げて、以上の自説を側面から強化している。その学者とはパラケルススで、^(註二)彼は恋愛を論じたこともなく、また自分の思想傾向とも全く違う人であるが、以上の自説と同じ見解がたとひ一寸の間でも彼の心に浮んだと見えて、全く別の事を論じている箇所で、つぎのような注目すべき言葉を記しているとして、それを掲げる。

「例えばダビデとウリヤの妻との関係は神が結びつけたものである。これは人間の心から見れば、正しい合法的な結婚には反している。しかし若しバテシバ(ウリヤの妻)が外妾としてダビデの胤^{たね}を受けなかったならばソロモンは生れなかったであらう。そこで神はソロモンのために、姦通ではあつたけれどもこの二人の関係を結んだのであつた。」

右の著名なダビデ王とその將軍ウリヤの妻との関係は、^(註三)種族の守神の特別の命令(この場合はイスラエルの黄金時代を築いたソロモン王を生むこと)を受けた激情的男女関係であつたわけである。姦通とか不倫とか言うけれども、

それは要するに人間関係の道德に反するだけのことで、神は時には、相愛者に対してそうしたものを振り捨てただけの恋愛激情を臨ませるといふわけで、神学者・哲学者でもあるパラケルススとショーペンハウエルとの所説の一致を示している。(註四)

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1348.

(註二) Theophrastus Paracelsus (一四九三——一五四一) スイスの医学者・自然科学者・神学者・哲学者。本論への引用は彼の多数の著書の二つ『長命について』(De vita longa) の一の五からである。

(註三) この記事はつぎの箇所にある、旧約聖書、サムエル後書一一ノ二五、二七、一二ノ一〇、二四、新約聖書、マタイ伝一ノ六。

(註四) ここは神学論ではなく恋愛論であるから、ショーペンハウエルの種族の守神もパラケルススの言う神も聖書の神も、すべて形而上の実体として同一の範疇に入れて論議した。しかし聖書的には微妙な疑問を含んでいるようである。聖書によれば、姦淫は単に人間社会の道德・法律に反するだけではなく、神の律法を犯すことである。良い子孫を生ませるために、神は姦淫の罪を犯さしめたとも考えられようが、罪とは人間の自由意志による神への反抗とされるから、これは無理な論理である。なお、マタイ伝の最初のイエス・キリストの系図の中には、このウリヤの妻の外三人計四人の姦淫の女が出て来て、イエスの系図が汚れていることを示している。この四人の女とも良い子を生むための姦淫であつたかどうかは兎も角として、聖書的に見るならばこれは、祖先に罪があつても、また人間の罪が如何に深くとも、その罪のまゝ救われることを示した大きな福音であるとされているようである。マタイ伝は、その最初の一見乾燥無味なイエスの系図書きだけで終つても、一大福音書であると極言する人さえある。さればといってこの福音を実現するために、イエスの祖先に姦淫罪を犯させたと考えるのも無理であらう。

前節までは主として恋愛が現象として発生するに至る形而上学的説明であつたが、本節は典型的な・激情的な恋愛そのもの、およびそれにまつわる心理的諸現象・恋愛事件などを、多くの詩人や学者の表現とからませながら形而上学的立場から説明する。多くの引例や例証にシェンハウエルシェンハウエルの博覧強記振りがよく現われている箇所でもある。さて本節の敘述は特に韻文的で、流れるように一つの事柄から他の事柄へと移って行き、その間の論理の段落を辿ることが困難なところも多いのであるが、筆者が理解を容易にするために適宜项目的に切り離して述べてみることにする。先ず人がよく知っている、恋愛における憧憬ゼンクト(*Sehnsucht*)と相手の男または女が得られない場合の言語に絶した悲痛の本質の説明で、彼によればつぎの如くである。

『さて恋愛におけるこの憧憬と悲痛とは、一時的な存在に過ぎない個体の欲求から発生する筈がない。これらは、自己の目的のために欠くべからざる手段が、この場合得られたり・失われたりする有様を眺めて、深くこれを嗟嘆する種族の霊の大息ノイフエルである。無限の生命を有するものは種族そのものだけであつて、この故に種族だけが無限の願望と無限の満足と無限の悲痛とを経験し得るのである。』

以上のように、恋愛における憧憬と悲痛の無限性は種族の無限性から説明されたが、直ぐそれにつづいて、それらが古来多くの詩人の材料になりながら、その筆力を超える存在であつた理由については、つぎのように述べられる。

『しかし、これら(無限の憧憬や悲痛)はこの場合、死すべき者すなわち人間の狭い胸の中に閉じ込められている。それ故に、この小さい胸が張り裂けるように思われたり、あるいは胸一杯に充ちた無限の喜び・無限の悲しみの予感に対してそれを言い表わすべき言葉も見当らないのは、少しも不思議ではないのである。そこでこれは、あらゆる崇高な恋愛詩に材料を与え、このような詩はそれに応じて一切の地上のものを超えた・超絶的な譬喩の境

に登るのである。』

以上は端的に言えば、有限なものの中に無限・永遠なものが詰め込まれて煮えくり返っている状態とも言えよう。これが、中世イタリアの世界に冠たる恋愛詩人ペトラルカ(Petrarca)の『敘情詩集』の主題であり、サン・ブルー(ルソーの小説『新エロイズ』の主人公)やヴェルテルやヤコポ・オルテスなど小説の主人公を生んだ素材なのであると、彼は述べている。

以上のように、憧憬と悲痛の無限性は種族の無限性から説明されたわけであるが、彼はこれ以外には理解方法も説明方法もあり得ないとして、その理由をつぎのように述べる。

『何となれば、恋の相手の何等かの精神的優秀さが、要するに相手の客観的・實在的優秀さが、相手をあのよう
に限りなく崇敬することの基礎となり得るものではない。ペトラルカの場合がそうであるように、たしかにこれは、往々婦人の方が十分正確に男子に知られていないためである。』

右の引用の前半は、事前に相手の心がつかめたとするならば、人間の心は大同小異であることが分って、そうしたものに無限の憧憬を馳せたり、それが得られないからといって胸も張り裂けるような悲痛を感じたりするわけがないというのである。つまり、相手の正体を見抜いたら、阿呆らしくて恋など出来るものではない。後半のペトラルカの場合とは、彼が聖アキラ聖堂で初めて会った美女ラウラ(Laura)に対して熱烈な愛慕の情を懷き、愛の苦惱を体験したことを指すのであるが、後半は前半を裏から述べたもので、つまり、相手の心が神秘の扉に閉ざれていることが恋愛の一つの基底条件ということになる。そこで世間でよく言われることであるが、恋する時人は地金を隠して「よそゆき」となり「猫かぶり」となることも、ここから理解されるわけである。しかし、これを自分の本心をカムフラージュしたり、相手の心をとらえたりするための煙幕や技巧と見るのは誤りで、実際これは恋愛時に臨むロマンテシズムの作用の一部なのであって、実際ロマンテシズムのとりことなり詩人となった当事者は、自分の本心を隠したり美

化したりするつもりはなくとも、事実上そうした結果になるものと見るべきである。

右にすぐ続いて、日本のいわゆる「一目惚れ^{ひとめぼれ}」の説明に移っている。しかし、その間の論理的な連関は幾分曖昧である。兎に角彼の敘述は次の通りである。

『ひとり種族の靈のみは、一瞥して如何なる価値を、彼女が彼に対して、および彼の目的に対して有するかを観破し得るのである。そこでまた最も大きな激情も、通常初めて相見た時に起るものである。』

「恋をしたことのある人で、一目見た時に、恋したのではなかったものがあるだろうか。」

シェークスピア『お気に召すまま』三の五（註四）

恋愛の当事者は相手の本心をつかめないという前項の表現と、しかし種族の靈は二人の恋愛の適応度を一目で見抜くという本項の表現と、この二つのシェークスピアによる表現の間には論理の飛躍があると思う。というのは、当事者双方の実体を先ず個別的に認識し、それを基礎知識として初めて恋愛の適応度の判断が可能となるからである。——ここで言う適応度とは二人による共同生活の幸・不幸の観点からではなく、二人の間から生れる子供の優劣の観点から見た度合を指すことは勿論である。——しかし、これは人間の思考の論理であって、種族の靈はこれらの一切を瞬時にして観破するので、シェークスピアも中間論理を省略したのかも知れない。

シェークスピアからの引用文を含む最後の文章への論理的連関も曖昧である。仮りに筆者がその問を補足してみるならば、恋愛の適応度の最も大きい場合は、種族の靈が、最も大きい激情をしかも二人の最初の一瞥において臨ませるというのである。さらにその根拠にさかのぼって推測するならば、恋愛の適応度の最大な若い男女の「出会い」が実現したということは、種族の立場から見れば言わば「書き入れ時」なわけであるが、当事者個人の何等かの心の働らき（周辺の社会からの阻止的働らきかけによるあきらめなども含めて）によって、二人の結合が遂に実現しないことにでもなるならば、種族の大損害となるので、種族の靈御自身が現場に即時的に圧倒的に臨み、当事者の世俗的

な心の働らきを麻痺させ、「恋は盲目」・「恋患らい」を実現させるのであろう。このようにして、シェークスピアからの引用文中の恋とは、つまり適応度の最大な恋ということになる。シェークスピアに限らず、すべて恋愛について述べた文章や諺の類はこうした高度の恋愛について語ったものと考えてよい。

つぎは「一目惚れ」についての以上と同様の説明を、別人の表現をかりて再説し、側面から自説を強化している。それはスペインの小説家マテオ・アレマン (Mateo Aleman, 1547-1614) の代表作『悪者グスマン・デ・アルフアラ・チエの生涯』の中からのつぎの一節である。

『恋するためには、時間を沢山かけたり、熟慮したり、選択したりするような手間は要らない。ただ最初の唯一の瞬間に、ある適応と一致とが互いに迎合すること——すなわち普通に「ジンバティー・デス・ブルーナス血の同感」と名づけられていることが——必要である。それには、星辰の特別の力が人を追い遣やるのが普通である。』(第二部第三卷五章)

右の最後のところで、恋愛の窮極の根源を星辰の特別な力においているが、これは、星辰が人間の運命を司さどると考えた古代の占星学 (astrology) 的思想の遺物であろう。星は現象的存在であるとしても、同時に人格的・形而上的存在と考えられているわけで、恋愛の窮極の根源を形而上の実体においている点で、方法論的にはシェーペンハウエルと同一である。

以上は、典型的な高度の恋愛は、日本のいわゆる「一目惚れ」となって現われることの説明であった。その方法論的立場は、事柄そのものが完全に個人を超え完全に種族的なものであるから、種族の立場からのみ説明され得るということであった。そこでその典型的な恋愛にまつわる諸現象も種族の立場から見るとき、よく理解され、よく説明され得るといふのが以下の敘述である。随伴現象の第一は失恋の悲痛である。この悲痛については本節の最初のところすでに説明した。しかし、そこでは恋人との結合が得られない場合を仮定しての悲痛、換言すれば、恋人との結合が得られるであろう場合の無限の予想的幸福感の裏返しとしての、それが得られないであろう場合の無限の悲痛感で

あった。こゝは、恋人との結合が得られないことが現実となった場合で、その悲痛の根柢は前と同様であるが、前は概論的で、こゝは細論的につきのよう述べられる。

『そこで、自分の恋人が競争者に奪われるか死によって失った場合は、それは熱烈に恋する人にとっては、他のどんな悲痛にもまさる悲痛である。というのは、この喪失は超絶的なもので、それは単に個人としての彼(愛人)に關係するだけではなく、彼の永遠の本性 (*essentia aeterna*) において、すなわち種族の生命において彼を侵害したからであり、また彼は種族の特別な意志と委任を受けて、この恋愛の場に召されたものだからである。』

恋人に振られた場合の失恋については、別に後述の箇所(第二十二節)で詳論される。こゝは恋人がライヴァルに取られた場合と死んだ場合であるが、前者すなわちライヴァルに取られた場合の苦悩の深刻性については、同じ理由から特につぎのように述べられる。

『この故にこそ、嫉妬アイフエルズフトは苦悩に充ちた・恐ろしいものであり、恋人を他人の手に渡すのは、あらゆる犠牲のうちで最大のものののである。』

つぎは、英雄ヘルトの失恋についてつぎのように述べられる。

『英雄は一切の悲嘆クラグを恥とするけれど、ただ恋の悲嘆だけは恥としない。というのは、この場合悲しく泣くのは英雄その人ではなくて、種族そのものだからである。』

つぎは、恋のためには一身にまつわる一切の地上の利益(金銭・地位・名誉・享樂・學問など)をかなぐり捨てる現象である。これは、日本で広く知られた歌「君と寝ようか、五千石取るか、何の五千石君と寝よう。」(註五)に、繪言葉で現われている。歌詞の全部がこれだけであり、実に純真・素朴・雄勁そのものである。これは丁度、神に召されて百八十度の回心をした者が、この世の榮えを捨てて神の御許に馳せ参ずる姿と非常によく似ている。シューペンハウエルによれば、戯曲の台詞を振り出しにして、つぎのように述べられている。

『カルデロン(註六)の戯曲『偉大なるゼノビア』の第二幕のある場で、デキウス(註七)はゼノビアに、こう言っている。

「忝(註八)じけなや！さらばおん身は私を愛するのであるか？！

その代(註九)には、私は幾百幾千の勝利をも棄てるであらう、

私はおん身に返らう。……」

この台詞に示されていることは、これまで凡ゆる利益(インテレッツ)に打ち勝つて来た「名譽(エーレ)」なるものも、恋愛すなわち種族の利益が登場して、その決定的な利得(ファルタイム)を眼前に見ると直ぐに、舞台から撃退されるということである。そのわけは、単なる個人的利益はどれほど重大であらうとも、そうした個人的利益に比べて種族の利益の方が無限に重大であるからである。そこで、名譽・義務・誠実などの精神が、あらゆる他の誘惑や死の脅威にさえ打ち勝った後でも、種族の利益にだけは屈服することになるのだ。』

つぎは、典型的な恋愛の当事者の行動の原動力としての恋愛が、道徳その他の人間社会の規範を蹂躪する事実が、つぎのように説明される。

『同様に私生活の面においても、この場合ほど人が良心の命令に従うことの稀な場合はなく、他の場合には正直で正義感の強い人々すら良心に従わないことが時々あり、また激情的な愛すなわち種族の利益が彼等をとらえた時には、姦通すら平然として行うという事実が発見されるのである。(後略)』

つぎは、フランスのモラリスト・評論家シャンフォール(Chamfort, 1741—1794)の次に掲げる言葉を引用して、右の自説を強化している。

『一人の男と一人の女とが互いに激しく恋する時には、二人を分けようとする邪魔ものが何であっても、例えば夫(おつと)や両親のようなものが邪魔ものであっても、二人はそんなものにおかまいなく、自然によって互いに相愛し、人間社会の法律や慣習にもおかまいなく、神聖な権利に基づいて互いに所有し合っているように、私には何

時も思われる。』

しかし、右の引用文よりも英諺の「恋愛と戦争は手段を採ばなう」(All's fair in love and war.)の方が、より端的に事の本質を示しているように思う。

さらにつづけて、ショーペンハウエルは聖書の記事を引き合いに出して、以上の自説(恋愛は道徳・慣習をも無視する)をつぎのように強化している。

『このことについて憤慨しようとする人は、救世主(基督)が福音書の中で、あの姦淫の女に対して示した不思議な寛容の態度を考えて見るがよい、その際基督は同時にそれと同一の罪を、そこに居合わせたすべての人々にも予想したのである。』

右の有名な「姦淫の女」の記事は周知のように、普通は新約聖書ヨハネ伝第七章五十三節から第八章十一節にわたって載っている。しかし、今日残存している写本の中にはこの美しい物語を欠く写本も多く、聖書学的には問題の多い箇所であるが、ここでは勿論恋愛論の立場からの考察である。先ず第一に、姦淫の女と言えば売笑婦的存在のいかにも墮落した女を想像し易いのであるが、実は目下許嫁中^{いざなひ}のみずみずしい娘(処女)であって、恋愛事件を起すのにふさわしい年齢であつたということである。このことは「石で打ち殺せ」という罰則(第八章五節)から逆に推論出来るのである。(旧約聖書・申命記第二十二章第二十三—二十四節)^(註九) 第二には、強姦的事件ではなくて、純粹の恋愛事件だということである。(申命記、前掲箇所第二十四節)^(註九) 第三に、記事中の第七節の中にある「罪」の解釈については学者間に異説があり、罪一般を指すとするものと姦淫罪を指すとするものとに分れるのであるが、ショーペンハウエルは後者をとっているということである。したがって、これによればそこに居合せた人々が皆すでに姦淫罪を犯していたことになる。このことは、——この娘は幸か不幸か発見されて現行犯で捕えられた(第三節)事例に属するだけのことであって、——こうした発見・未発見を問わず姦淫は、当時の古代社会において広く行なわれてい

た社会事実であつたことを物語るものと云えよう。

さて以上の三つの事実に基づいて、恋愛論の立場から批評するならば、先ず第一に、若い娘が許嫁おつとの夫を差しおいて別の男と情交したのであるから、これを典型的恋愛の事例としてシヨーパーンハウエルが引き合いに出したことは、まことに当を得ていると言えよう。つぎは、基督は何故に姦淫の女の罪を赦し給うたかに問題があるう。恋愛は種族に奉仕することであるから罪ではないというふうなシヨーパーンハウエル流の恋愛観からではないことは勿論であり、また聖書のこの記事中に、その娘の長所・美点とか情状酌量すべき点は何も見当らないことに注意したい。そこで基督教的に考えて、自分に同じ罪がありながら他人の罪を審くことの罪を、学者・パリサイ人(第三節)を中心とするその場に居合わせた人達に教え給うたのであるとか、罪の赦しの福音(ルカ伝第十九章十節など)の一つであるという解釈も、立派に成立するであらう。しかし、シヨーパーンハウエルによれば、肉体的存在でもある人間の集団の中の出來事であるから、宗教的考察が同時に全面的考察とはなり得ないのであって、恋愛の立場からの考察が許容されることとなり、恋愛においては種族の靈という超個人的な力が作用するので、個人の意志力などでこれを制御することは不可能または困難な事実が、基督が姦淫の女の罪を特に赦し給うた一つの根拠だということである。つぎに、シヨーパーンハウエルによれば、そこに居合わせた人たちが皆すでに姦淫罪を犯していたということは、当時の律法主義の社会においてさえ姦淫が普遍的であつたといふことなのであり、このことも姦淫の根源が必然的なものであることを示しており、従つて時に道徳・律法を蹂躪することを示している、と言うのである。

つぎに、イタリアの文学者ボッカッチョの名著『十日物語』(Decamerion)を批評して、『この見地からすると、『デカメロン』の大部分は、種族の靈が個人の權利と利益とを自分の足下に蹂躪して、その上に加えた嘲笑ニエボットや侮蔑ホーシにすぎないように思われる。』と述べており、この種の見方をする学者が他にもあるようであるが、文芸的素養を欠く筆者においては論評を省略せざるを得ない。

つぎは、相愛の二人が各々その所属する社会階級や身分などに上下の隔りがある場合、そうしたものが一時は障害となつても、それが典型的な恋愛である限り、同一の論理において、すなわち種族の靈の圧倒的支配において、そうしたものを『粉殻もみ殻の如く吹き飛ばす』と述べているが、これはよく文芸作品の主題ともなり、よく知られていることであつて論評の要はないと思う。さらに同じ理由から、そうした場合に、どんな危険グライムでも喜んで引き受けられ、他のことでは臆病な人でさえも、この時ばかりは勇敢になると述べている。

本節の最後は、右と同一の観点から戯曲や小説に現われた恋愛事件を論じている。最初に正統的な恋愛喜劇について、つぎのように述べているが、その論旨は右と同一なので、理解も容易であり、別に論評の必要もない。ただ、その行間にショーペンハウエル独特の皮肉な表現を織りませ、その背後に彼の厭世觀的人間觀を垣間見せながら流れ行く彼の行文を味得すべきであらう。

『また、戯曲や小説において、恋愛事件のために、すなわち種族の利益のために戦かう若い人達が、ただ個人の幸福だけを考へている老人に対して勝利を得るのを、私達は喜ばしい同感をもつて眺める。けだし相愛する二人の努力が、これに反対する如何なる努力よりも、はるかに重大で・高貴で、それ故にまた一層正当であることは、種族が個人よりも一層重大であることと同じなのである。したがつて、殆んどすべての喜劇コメディの根本主題は、そこに登場する人々の個人的利益と衝突し、したがつてこれらの人々の幸福を転覆しようとする目的を持った種族の靈の出現なのである。普通には種族の目的が貫徹されるが、これは詩的正義にかなつたものとして觀客を満足させる。それは觀客は、種族の目的の方が個人の目的よりもはるかに大切なことを感得するからである。それ故に、喜劇の終末において觀客は、勝利の栄冠に飾られた相愛者を見て、すっかり安心して帰宅する。というのは、相愛者たち自らがこれによつて自分たちの幸福を築き上げたと妄想すると同様に、觀客もそう思うからである。しかし實際は恋人たちの方が用心深い老人の意見に逆らつて、自分の幸福を犠牲にして種族の幸福に奉仕したのであつた。』

つぎは、僅かばかりの変則的な喜劇^{ルストシユビル}について述べる。この種の喜劇では事態を顛倒して、種族の目的の方を犠牲にし個人の幸福を貫徹させようと試みているが、この場合は観客は種族の霊が受けると同じ苦痛を感じ、これによって確立された個人の利益のために慰められることはない、と述べている。この種族の喜劇で、シヨープンハウエルの頭に浮んだ一、二の著名な小篇として、『十六才の女王』(La reine de 16 ans) と『理性の結婚』(Le mariage de raison) とが挙げられている。

最後に、恋愛悲劇について、『恋愛事件を取り扱った悲劇では、大抵は種族の目的が水泡に帰するので、その道具となった相愛者も同時に滅びるのである。』と述べ、実例として、『ロミオとジュリエット』・『タンクレット』(Tankred)・『ドン・カルロス』(Don Karlos)・『ヴァレンシタイン』(Wallenstein)・『メシナの花嫁』(Baut von Messina) が挙げられている。

ここでシヨープンハウエルが文芸作品中の恋愛について論じたことについては、方法的に吟味して見る必要がある。形而上学とは「存在」の究極的研究とされるから、こうしたフィクシヨンの研究は形而上学にはならないわけである。若し、こうしたフィクシオンが「存在」の描写・反映であるとするならば、一々の作品の基礎となった社会事実(小説のいわゆるモデルのようなもの)が指摘されなければならない。また若し、人間の一切のフィクシオンは何等かの「存在」との連関を持つというならば、それを方法的に基礎付けなければならない。そこでこの場合は、こうしたフィクシオンと、それが読者や観客の心にうったえて惹き起す反響の様相(喜び・悲しみ・快苦など)との連関を、彼の恋愛論の立場から基礎付けたものと見るべきである。

最後の恋愛悲劇は単なるフィクシオンとしてだけではなく、現実にも存在することは人のよく知るところであるが、種族の霊がこうした典型的恋愛を生み出しながら、その自己貫徹が挫折に終わるのは何故であろうか。それに就いてシヨープンハウエルは直接説明を与えてはいない。それは、種族の霊といえども現象界においては個人の肉体を

媒介としなければならず、現象界はそれ自身の法則で動く部面を有するからなのであろう。かくして、典型的恋愛が成就すれば個人は種族の霊に奉仕したこととなり、それが挫折に終われば個人は種族の霊と殉死することとなり、人間は所詮他物の傀儡にすぎないことを、これらの文芸作品は教えているといえよう。

(註一) Edward Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1348 ff.

(註二) 本論集、第五卷、第三号、本研究(上)三七頁、(註八)

(註三) このロマンテシズムについては彼が再三述べている。例えば、本研究(上)四三頁、四五頁。さらに、次節でも説いている。なお、中世のロマンテック・ラヴについては、本研究(上)二四頁。

(註四) Who ever lov'd, that lov'd not at first sight?
Shakespeare, As you like it, III, 5.

(註五) この歌を生んだ歴史的事実は、和島芳男教授によれば、天明五年(一七八五)七月、藤枝外記という旗本が江戸新吉原の遊女綾衣と情死した事件とするのが、通説であると言う。ただし藤枝の禄高は四千石であったので歌の数字と合致しないのであるが、これは歌謡論としても恋愛論としても一向差支ない。しかし、同教授によれば異説もあって、それによれば、時代は少しく古く宝暦元年(一七五一)三浦肥後という旗本が、ある恋愛事件で五千石を没収された事件を指すという。何れにしても、恋愛論としては、この種の恋愛事件が歴史的事実として二つも指摘されただけで充分である。なお、この歌が世の共感を得て、広く流布した歴史的事実にも、恋愛論上の真理が認められる。

(註六) Calderon (1600—1681) スペインの劇作家。

(註七) デキウス (Decius, 200 頃—51) ローマ皇帝。

ゼノビア (Zenobia, 274 以後没)、パルミラの女王、美貌をもって知られる。

(註八) 有夫の女の姦淫の場合は旧約聖書、レビ記第二十章第十節、及び申命記第二十二章第二十二節。

未婚の女の場合は、申命記第二十二章第二十八—二十九節。

(註九) 許嫁の女との強姦的な場合は、申命記第二十二章第二十五―二十七節。

二十一 (註一)

本節は恋愛が最高潮に達した状態の形而上学的描写である。その原理を彼はつぎのように述べる。

『人が惚れ込んでいる状態は、しばしば滑稽な・また時には悲劇的な現象を呈するものである。それは、この二つの場合とも、その人が今や種族の霊によって占領され、支配されていて、もはや自分が自分自身ではないからであって、そのためにその人の行動は個人としての自分には不適当なものとなるのである。』

右の敘述の中で『しばしば滑稽な』というのは、第三者からは相愛の二人がお目出度くなっているように見えることで、それは二人に臨むロマンテシズムの仕業なのであり、そのことについては再三述べて来たのであるが、それが以下においては言わば変曲されて、つぎのように繰り返し詳論されている。

『恋愛状態が高度の段階に達すると、その人の考えることは、非常に詩的でその上崇高な色調を帯びて来るばかりでなく、超絶的^{トランスツェンデント}でまた超自然的な方に向うようになる。そのために、その人は本来の自分のための形而下的な目的を全く眼中に置かないように見える。これはつまり、その人が今や種族の霊に鼓舞されており、種族の事件は単なる個人的事件よりも重大であるためで、彼は種族の特別の委任を受けて、彼が父となり彼の愛人が母となって初めて生まれ得る・全く個性的で一定した構成を有する子孫が、無限にわたって生存する基礎を作るためにあるからである。(中略)このような超絶的重要性をもっている事件に尽しているという感じは、恋に陥っている人々をして一切の地上的な事柄や自分自身をさえも超越させ、彼等の甚しく肉体的な願望にも超肉体的な衣裳をまとわせる。そのために恋愛は極めて凡俗^{プロダージュ}な人の生涯においてさえも、一つの詩的な挿話^{エピソード}となり、この場合事態はしばしば一つの滑稽な色調を帯びることとなる。』

事柄が重大であるという恋愛当事者の感じがロマンテシズムを生む、という右の最後の文章は、彼の既述の論理とは理由と帰結が逆になっているように思われる。つまり、彼の既述の論理によれば、種族の靈が臨ませたロマンテシズムが当事者に事の重大性を教えるわけなのである。事が重大であるからロマンテシズムを臨ませるのは、種族の側における目的論的行為なのである。かくして種族の靈は二重の方策を採用していることとなる。第一は己に述べたように、^(註二)恋愛は實際は種族のためのものであるのに、本質的に利己的な人間に対して、恋愛は利己的なものだという妄想（錯覚）を植え込むことである。第二は、ロマンテシズムを臨ませることによって、恋愛は他に奉仕する偉大なことであることを当事者に教えるのである。^(註三)かくして、恋愛当事者の心には、極端に利己的なものと極端に利他的なものとが烈しい対立のままに存在すると言えよう。なお、このロマンテシズムは恋愛時だけの臨時的なものでもあり、局外者の冷静な眼には、独り善がりの的に御目出度くなっているように見えるので、言わば滑稽ということになる。

つぎは、恋愛の最高潮時につきまとう深刻な悲劇的様相を、形而上学的立場から彼はつぎのように解説する。

『種族のうちに客観化している意志は、それが恋する人の意識に現われる時には、その女性との結合によって無上の幸福^{ゼリヒカイト}が得られるであろうという予想の仮面^{マスク}をかぶって来る。恋愛が最高潮に達すると、この幻想は非常な光輝を発して、若しこの恋が成就しなければ、人生そのものまでもすべての魅力を失い、今や人生は悦びなく・味気なく・何の楽しみもないように見えてくる。そのために、人生に厭気^{いんき}がさして、死も恐ろしくなくなり、時には進んで命を縮めることにもなるのである。このような人の意志は種族の意志の渦中に引き込まれたのであるか、または種族の意志が個人の意志を圧倒しているのか、その人は、種族の意志の立場で活動することが出来ないか、と、自分の意志の立場で生きながらえるのを軽蔑するようになる。この場合、個人というのは、ある特定の対象に集中された種族意志の無限の思慕を容れる器としては余りにも弱すぎるのである。そこで、こうした場合、自然が人間の生命を救うために、このような絶望状態の意識を狂気^{シュライエル}という面纱^{おほ}で覆うてくれるのでなければ、結末は

自殺となり、時には相愛者の情死ともなるのである。——如何なる年も、すべてこの種の数多の出来事によって以上の解説の真実なことを証明することなしには、過ぎては行かない。』

以上は、とにかく深刻な描写である。シヨーパーンハウエル自身が体験したものでなければ、広く文芸作品を渉猟した賜物であろう。狂気は死を免かれしめるための自然の救済策であるという表現には、彼の形而上学の特徴がよく現われている。ダッシュ記号に続く最後の文章は、自負と皮肉と道草とを兼ね備えたもので、ここにも彼の持味がよくにじみ出ている。

(註一) Eduard Grisebach, op. cit., Bd. II, S. 1352 ff.

(註二) 本論集、前号、二二頁。

(註三) 日本でも、恋愛の本質は、自己を空しうして他に奉仕することである、と考えられた。それは、臣下が君主に忠誠を尽す姿と非常によく似ているので、恋人をも君(きみ)と呼ぶようになったことに現われている。

A Study of Schopenhauer's "Metaphysics of the Sexual Love" (III)

Résumé

According to Schopenhauer, such attitudes are seen in the persons selecting the object of sexual love as the deep seriousness, the critical scrupulousness, the cautiousness not to be deceived, and the serious taking of the excess and deficiency in the essential part of the object,—all these are due to the importance of this affair, the development of human species.

In the next place, he explains the birth and extinction of the sexual love which is directed absolutely to the one and only object and is tinged with such loftiness and sublimity that its dissatisfaction might even make the lovers lay their own lives down.

Then, citing the remarks and productions of many notorious poets, novelists, and scholars, he explains the typical, the most passionate sexual love itself and the serious phenomena that accompany it.

His next metaphysical predication is the mental description of the lovers who have reached the climax of their typical love; some phases of his description are comic, but others tragic.